

京都大学	博士(文学)	氏名	関 口 裕 昭
論文題目	パウル・ツェランとユダヤの傷 — 《間テキスト性》研究 —		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、第二次世界大戦後のドイツ語圏を代表するユダヤ人の詩人パウル・ツェラン (1920～1970) とユーデントウム (ユダヤ性、ユダヤ精神) との関わりを、その影響を受けた重要な人物ごとに詳細に論じたものである。年代的には、彼が詩作においてユダヤ性を明確に意識して書き始めた1960年から1970年の死までの10年間の考察の対象とされる。個々の詩の丁寧な解釈を中心にしながら、全体としてツェランにとってユーデントウムが何を意味したのかが浮かび上がるように構成にも配慮されている。七つの章には、論述の中心となるユダヤ的テーマあるいは形象がタイトルとしてつけられている。さらにそれぞれの章では、一人または二人のユダヤ人との影響関係が集中的に論じられている。そして最後のイスラエル旅行によって、二つに分裂していた両極性が合一する過程が明らかにされた。</p> <p>ドイツ本国では「ツェランとユーデントウム」というテーマのもとに、二つの優れた先行研究がある。ギュンツェル (1995) とケレ (1997) の業績である。論者はこれらから多くを学びつつも、その後十年余りの間の新資料を精査し、またツェランの蔵書を調査して、その書き込みから多くの事実を発見した。とりわけ重要な発見は次の三点である。全テキストを通してカフカの引用あるいは暗示が特権的な役割を果たしていること、レヴィ＝ストロースの思想の影響がツェランの「間テキスト性」において見られること、ユダヤ的な女性原理・男性原理を代表するシェキーナとモーセの影響が認められることである。以下、各章の内容を簡略にまとめてみる。</p> <p><b>第1章 薔薇 — パウル・ツェランという傷</b></p> <p>ツェランの詩に頻出する詩的形象として「傷 (Wunde)」がある。これは何を表すのか。</p> <p>まず第5詩集『息の転回』における2篇の詩から、ツェランにおける「傷」の二つの意味を確認する。すなわち、一方でそれは「尖鋭な角 (Horn) = 傷としてのエクリチュール」として詩作と体験の原点として機能し、他方では長年にわたってユダヤ人を苦しめてきた「記憶の傷」となり、ディアスポラを強いられた民族の「散種」と関わっていることを明らかにする。</p> <p>次に「傷」のイメージがツェランの独創ではなく、ドイツ・ユダヤ文学の伝統の中で繰り返し描かれてきたことを、ハイネ、カフカ、ローザ・ルクセンブルク、ネリー・ザックスの作品で確認する。ツェランがこれらの作品を詩作に取り入れていたことを、</p>			

詩「凝固せよ（コアグラ）」を例に実証する。「お前の傷も、ローザよ」という冒頭の詩句は、カフカ「田舎医者」に登場する少年の腰にできた「薔薇色の傷」であると同時に、ルクセンブルクが獄中で書いた手紙に描写されている、血にまみれた「水牛の傷」でもあるのだ。このように、「傷」は様々な引用が召喚され、またそれらが「凝固」して詩として生み出される場所であること、「傷」はツェランの「間テキスト性」の符牒でもあることを述べて、全体の序論とする。

ドイツ・ユダヤ文学におけるユダヤ人としての「傷」あるいは「痛み」にツェランが自らも参入し、個人の生を超えた長い時空にまたがるテキスト構造体（＝「間テキスト性」）を構築しようとしていたことを解明するのが、本書全体の目的である。

## 第2章 アーモンド——ツェランとマンデリシュタームの対話

ツェランの詩作におけるユダヤ性（Judentum ユーデントウム）が明確に打ち出されたのは、第4詩集『誰でもない者の薔薇』が最初であるが、これはラーゲリで悲劇的な最期を迎えたロシアのユダヤ系詩人マンデリシュタームに献呈されている。マンデリシュターム（この名前は「アーモンドの木」を意味する）からツェランはその詩論の核となる「対話としての詩」「投壘通信」といった概念を学びとったほか、ロシア語からの翻訳を通して「間テキスト性」の重要性に気づいていたことを訳詩「不眠。ホメロス」に丹念にたどる。そのほか、薔薇、鶴やツバメといったモチーフに共通する意味、伝記的事実に関する共通性（母の死、剽窃事件）なども考察する。このテーマはドイツではすでに先行研究がいくつかあるが、それらを検討しつつ、これまで論じられなかったラジオ放送用の原稿「マンデリシュタームの詩」を中心に論じたこと、「間テキスト性」において二人の詩人を結びつけた点が新しい成果と言えるだろう。

## 第3章 アウシュヴィッツ——ベンヤミン、アドルノと対峙するツェラン

ツェランは早くからベンヤミンに注目し、その思想やモチーフを詩に取り入れてきた。1968年に成立した「壁の文句」には、クレーの絵をヒントにベンヤミンが考案した歴史の天使が「歪められた」姿で登場する。ツェランにとってベンヤミンの天使は瓦礫の前に佇みながらもなお希望を秘めた存在として映り、それをさらにラジカルに否定したのがその詩である。さらに、遺稿に発見された詩「ドイツのポル・ボウ？」においても、ベンヤミンのゲオルゲ・クライスへの親近性を糾弾している。このテーマはドイツにおいてはすでに2論文があるが、日本では初めての研究となる。

アドルノについては従来、「山中の対話」との関連のみが論じられてきたが、最近公開された、アドルノとの17通の往復書簡を手がかりにして、ツェランから見た新たなアドルノ像を描いた。アドルノが述べた有名な言辭「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」を常に意識し、それに対抗しつつ、ツェランはドイツ語で書くユダヤ詩人としての道を歩み始めるのである。

ベンヤミン、アドルノ、ツェランを繋ぐのがカフカであり、本章を通してカフカが隠れた糸となって、第4章への橋渡しをする。

#### 第4章 シェキーナ、あるいはユダヤの母なる存在

最愛の母を強制収容所で失ったツェランは、詩人ネリー・ザックスとマルガレーテ・ズースマンに母に代わる存在を見出そうとした。54年から死ぬまで手紙の交換を続けたザックスは「パリとストックホルムの間には苦痛と慰めの子午線が走っているのです」とツェランに書き送る。言葉の子午線によって両者は固く繋がっていた。本論文では、1960年の彼女との出会いが詩集『誰でもない者の薔薇』の第2ツィクルスを形成する原動力になったと考え、従来の説よりも一段深く踏み込んだ詩的交流があったことを、モチーフを比較しながら詳細に検討する。「痛み」「傷」「塵」「星」等の形象をザックスから学び、取り入れることにより、ツェランは詩的空間を拡大することができたのである。しかしザックスの精神病の発病に伴い、次第に疎遠になり、ズースマンがそれに代わる存在となる。

詩人・批評家のズースマンとは63年にチューリヒで出会ってから、66年の死までしばしば訪問し、親しい文通を続けた。ツェランにとって彼女は、ユダヤ的存在を具現化した典型であり、心から尊敬できる「ユダヤ的人物」であった。両者の交流はまだほとんど研究されておらず、本論文が日本では初めての論考ということになる。ツェランがズースマンに捧げた2篇の詩の解釈を中心に、ユダヤ思想の受容についても論じる。

ザックス、ズースマンの薫陶を受け、ツェランの詩の「あなた (Du)」はユダヤ神秘主義の女性的神性のシンボル「シェキーナ」の要素を帯びてくる。これは後年のカバラ受容の伏線となる。

#### 第5章 モーセ、あるいはユダヤの父なる存在 —— フロイトとカフカを読むツェラン

晩年のツェランの詩には、植物学、生理学、地学、医学、心理学など自然科学の専門用語がちりばめられている。中でも重要なのはフロイトの著作からの引用であり、心理学・精神医学への関心は、彼自身の精神病とも密接に関連している。

本章でも各詩の綿密な読解が重要な位置を占める。たとえば「フランクフルト、9月」はフロイトとカフカの引用からなる難解な詩である。この両者は喉の傷を通して繋がっている。しかしそれだけではない。論者はフロイトの「モーセと一神教」、カフカの「父への手紙」をツェランが熱心に読んでいることに注目し、ユダヤ的父性への関心が両者を結びつけていることを指摘する。ドイツ・ユダヤ文学を網羅するテキスト複合体を作ろうとする意図は、見えない父性的な神なるものへの畏怖からなされていることを、ハンデルマンの間テキスト理論を援用しながら詳述する。

またカフカとの関連も新しい資料を用いつつ、身体をキーワードに新たな光を当て

た。

## 第6章 カバラ ― ツェランとゲルショム・ショーレム

1967年4月から翌月にかけて、ツェランはユダヤ神秘主義思想（カバラ）の碩学ゲルショム・ショーレムの著作と集中的に取り組み、その成果はいくつかの詩として生み出された。第6詩集『糸の太陽たち』第IV部、第V部の9篇の詩がそれである。ツェランのカバラ受容については、ギュンツェル、フィルゲスらの先行研究がある。前者はツェランの蔵書にあるショーレムの『神性の神秘的形姿について』を調査し、引用の典拠をいくつか指摘しているが、調査が十分ではなく見落としがある。また後者はわずか9篇のうち3篇しか考察の対象にしていない。論者はこれらの先行研究を参考にしつつも、それらを補足訂正しながら9篇の詩を詳細に解釈し、ツェランのカバラ解釈の全容を明らかにする。そこから「子午線」が新たな文脈でよみがえってくる。

またこれらの引用のモザイクからなる詩が生まれたのは、同じ頃ツェランが読んでいたレヴィ＝ストロース『野生の思考』の影響と推論する。「ブリコラージュ（寄木細工）」から神話的思想を再構築するように、ツェランは詩を構築しようとしていたのであり、蔵書への書き込みからもそれを裏付けることができる。これは後期ツェランの理解のための新たな試金石となるであろう。

## 第7章 エルサレム ― 「エルサレム詩篇」を読む

1969年10月、死の半年前、ツェランはエルサレムをはじめイスラエルの各地を訪問、帰国後その印象を詩に書いた。「エルサレム詩篇」と呼ばれる20篇の詩群がそれである。ここにはツェランのイスラエルに寄せる思いとユダヤ思想が凝縮されている。その冒頭の詩「アーモンドの女」には、ヘブライの詩人ビアーリクの詩の引用が織り込まれている。本章では、ツェランのイスラエル旅行を再現しながら、これらの詩篇を詳細に解釈する。「両極に」の詩において、両極性を形成していたさまざまな対立 ― Ich と Du、発話と沈黙、男性原理と女性原理、生と死 ― が最終の地エルサレムにおいて合一されるのを読み取る。

## 結語 子午線 ― 円環を描く言葉の道筋

本論文の総括として、「傷」が無数の言葉の線となって「子午線」を形成し、「私 (Ich)」と「あなた (Du)」を結びつけるその線が、円環を描く言葉の筋道になることを指摘する。こうした両極性の思想をツェランはブーバーの『ダニエル』から学びとっていた。ツェランの詩に円や球イメージが頻出するのはこのためであり、出会いを求める言葉は、子午線を描きつつ広大なテキスト空間を織りなしているのである。

(論文審査の結果の要旨)

詩人パウル・ツェランは、ドイツ文学研究の分野で現在最も強い関心が寄せられている文学者の一人である。また今日ツェランの詩は、ドイツ語圏にとどまらず国際的にも大きな影響を与えている。ルーマニアのチェルノヴィッツにおいて1920年に生まれ、ウィーンで一時暮らした後、フランスのパリに居を定め、1970年にセーヌ川に身を投じて自ら命を絶ったツェランは、ユダヤ人であった。第二次世界大戦中、彼の両親は強制収容所で命を落とし、彼自身も一時期労働収容所において苛酷な体験をした。ツェランの生涯は、二十世紀のユダヤ人の運命に深く関わっている。

ツェランの詩はきわめて難解なことでも知られる。ことに「ゴル事件」と呼ばれる剽窃疑惑スキャンダルに巻き込まれた1960年以降の詩にあっては、ユダヤ性・ユダヤ精神への関心に基づく詩が増えるため、理解し難さはいっそう甚だしい。この難解なツェランの文学を、本論文は、ユダヤ性・ユダヤ精神への彼の関心と関わらせて探究し理解しようとするものである。論者はこれまでに、ツェランの遺族や友人たちへの聞き取りをも交えて紀行文風にまとめた『パウル・ツェランへの旅』、ならびに一次文献のみならず、最新の研究を含め数多くの先行研究も駆使した『評伝パウル・ツェラン』等の著作を著してきた。ツェランの文学を、ユダヤ系の文学者や思想家の作品や著作と関わらせて間テクスト的に論究した本論文は、これら前二著を内容・規模ともに上回る浩瀚な労作である。

論文は全七章から成る。

まず第1章では、「傷」の形象がツェランの詩全体の中で果たしている役割が確認されると共に、ハイネ他四人の作家の作品を通して、ドイツ・ユダヤ文学が展開される過程での「傷」のイメージの変遷もたどられている。ツェランの作品に見られる「傷」のイメージが、他の文学者のテキストと関係しつつ、新たなテキストをいかに創造して行くかという、本論文全体に通じる問題設定がなされている章である。

第2章では、ロシアのユダヤ系詩人マンデリシュタームのツェランによる受容の問題が扱われている。マンデリシュタームの詩の多くをドイツ語に翻訳したツェランが、「対話性」をはじめとする詩作上の概念を彼から学び取ったことが明らかにされている。本論文において初めて本格的に取り上げられることになった、「マンデリシュタームの詩」というラジオ放送用の原稿を中心に論が進められているため、両者の文学の間テクスト性についての新たな知見が示されている。詩論という点に限って言えば、本論文の中でも最も充実した章である。

第3章では、ベンヤミンならびにアドルノという二人のユダヤ系の思想家のテキストを、ツェランがどのように読み対決したかということが論じられている。ベンヤミンに関しては、そのゲオルゲ・クライスへの親近性へのツェランによる論難というテーマが日本で初めて扱われ、アドルノに関しては、西欧文明への同化の傾向がアドルノの方がツェランに比べてより強かったということが鮮やかに示されている。

第4章では、ネリー・ザックスとマルガレーテ・ズースマンという、ユダヤ系女流文学者との交流と創作上の影響関係が考察されている。ザックスに関しては、従来言われていた以上に両者には詩的交流があったことが、モチーフの詳細な比較検討を通して明らかにされている。一般にはあまり知られていないズースマンに関しても、ツェランが彼女の著作のユダヤ思想史上の重要性を認めたことが指摘されている。

第5章では、ツェランのフロイトとカフカとの関係が論じられている。論者は、ツェランがフロイトの「モーセと一神教」ならびにカフカの「父への手紙」を熱心に読んでいたことに着目し、その根底にはユダヤ的父性への関心があったとみなしている。ドイツ・ユダヤ文学を網羅するテキスト複合体を作ろうとするツェランの意図は、見えない父性的な神なるものへの畏怖からなされているということが、鮮やかに示された章である。

第6章では、ゲルショム・ショーレムのカバラ論の受容というユダヤ神秘主義に関わる問題が考察されている。いわゆる「カバラ詩篇」について、ツェランの蔵書中にあるショーレムの著作の調査に基づく先行研究が補足訂正され、ツェランによるカバラ解釈の全体像が明らかにされている。また、ツェラン研究者の間でもこれまで知られていない、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』の影響の重要性も指摘されている。

第7章および結語においては、晩年の「エルサレム詩篇」が主に取り上げられている。両極性を形成するさまざまな対立の合一が、ブーバーの思想も批判的に受容されつつ、イスラエル旅行に基づく詩篇において表されているという解釈が明確に打ち出されている。

このように本論文は多くの創見に富むきわめて優れたツェラン論である。その論の基礎にあるものとして特記すべきは、論者の資料探索の徹底性である。論者は足かけ15年にわたりドイツのマールバッハのドイツ文学資料館に何度も足を運び、かつてツェランが所蔵していた書物中の書き込みや下線・傍線を、自然科学関係の書物にいたるまで詳細に調査した。それらの書き込み等の一部は、この間に公表されもした。しかし本論文において初めて指摘されている箇所も少なくない。もっとも、文学作品を解釈するにあたっては、このような作業が必ず必要というわけではない。しかし本論文で扱われているような作品についてはことに有効であり、その成果が見事に生かされていると言えよう。本論文は今後、ツェラン研究者のみならず、ユダヤ系の文学者や思想家に関心を寄せる人々によって広く参照されることであろう。

ただし、このように高く評価できる本論文にも、望みたい点がないわけではない。誤字・脱字等表記上の細かな誤りが散見される点については、いっそうの綿密さを求めたい。また、軽く触れられているにすぎないグスタフ・ランダウアーについても詳しく論じられておれば、本論文はさらに充実したものになったと思われる。革命家として知られるだけでなく、ドイツ神秘主義にも深く関心を寄せ、ユダヤ系思想家フリッツ・マウトナーの『言語批判論集』の意義もいち早く認めたランダウアーについ

て詳しく論じられておれば、マウトナーの言語批判とも関連するホフマンスタールの「チャンドス卿の手紙」からツェランがことその他強い影響を受けていたところからして、論はさらに深まったものと思われる。ただしこのランダウアーとツェランの関係について、論者はそう遠くない将来、論考を発表する予定とのことである。論者の今後の研究のさらなる進展を大いに期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2011年5月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。